

Reprinted from :

Hiroshima Journal of School Education, Vol.14, 2008

米国で視察した品格教育 (Character Education) の実際

青木多寿子・宮崎宏志・橋ヶ谷佳正

学校教育実践学研究第14巻 (2008年3月) 別刷
広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター

CENTER FOR SCHOOL EDUCATION RESEARCH AND DEVELOPMENT

Graduate School of Education, Hiroshima University

米国で視察した品格教育 (Character Education) の実際¹

青木 多寿子・宮崎 宏志*・橋ヶ谷 佳正**

(2007年12月3日受理)

School Inspections about Character Education on the East Coast in USA

Tazuko AOKI, Hiroshi MIYAZAKI and Yoshimasa HASHIGAYA

Abstract. The purpose of this paper is to report the findings of school inspections that focused on character education on the East Coast of the United States. We visited five schools and found that the schools had unique approaches to character education. One of the schools had been named a National School of Character in 2003. This award was given by Character Education Partnership an organization that promotes the development of programs about character education. Two of the schools were public schools in the Brookline Massachusetts Public System. We found that the religious schools had core values based on their religious doctrines. Some of the other schools' core values were based on their mission statements or on feature of their communities. One of the schools did not have a clear statement about character education. However all of the schools had programs or extracurricular activities that taught character education. We found that in one small geographical area there was great diversity in the kind of character education being taught.

アメリカの人格の完成を目指す品格教育 (character education) が紹介されるようになった (青木, 1999, 2002 a, b ; 加藤, 2004, 2006 ; リコーナ, 2001, 2006 ; ディヴィアン他, 2003)。Ryan & Bohlin (1999) によると品格教育とは「よいキャラクターとは、何がよいのかを知っており、良さを志向し、良さを実践すること (knowing the good, loving the good, and doing the good)」と定義し、この3つは結びついたものとしている。つまり、よいキャラクターとは、良い行為、よい活動の習慣以上のものであり、知識 (knowing)、志向 (loving)、実践 (doing) の3つを兼ね備えて良い行動をとる人のことをさす。そして学校教育の中で、これを地域とのパートナーシップでこの品性を磨く教育を行っていかこうとする動きが1980年代の中頃のアメリカで生じてきた。

では、品格教育は実際にアメリカではどのように行われているのだろうか。本稿は、2007年10月に視察した品格教育の実践校の視察報告である。

ここで取り上げた学校は次のようにして選定した。まず、ボストン大学の人格の教育と倫理開発センターに連絡を取り、ボストン近郊でお勤めの学校の紹介をお願いした。そして紹介していただいたのが今回訪問したニュージャージー州の私立学校、ボストン市内の公立学校と私立学校、そしてボストン大学の附属学校である。次に個人的に連絡を取り、ワシントンDCにあるキャラクターエディケーション・パートナーシップ (CEP) を訪問した。本稿はこれらの視察をベースに、①品格教育の賞をもらった学校、②宗教色の強い学校、③公立学校、附属学校に分けて、アメリカで実際に行われている品格教育の状況を報告する。

1. モンテクレール・キンバレー学院 (The Montclair Kimberley Academy)

幼稚園年中組から高校までを持つ私立のこの学校は、品格教育に関して2003年にNational School of Characterという、品格教育の実践の優秀校に

*岡山大学教育学部、**岡山大学教育学部研究科

送られる賞を受けている。元々、3つの私立学校が合併してできた学校とのことで、3つのキャンパスのある学校となっている。それぞれのキャンパスは、年齢によって在校生が分けられ、幼稚園年中組から小学校3年生まで、4年生から中学2年生まで、そして中学3年生から高校3年生までで分かれており、それぞれのキャンパスが全体の方針に従って、自校のカリキュラムを発達させていた。学院長は一人で、各キャンパスには校長がおられる。また、品格教育は、一人の女性ディレクターが人格の完成を目指す品格教育の開発担当者として、3つのキャンパスを行き来しながら、各学年の教員に役割を割り振ってカリキュラムの発達に力を注いでいた。この学校が核とする徳は資料1に示すとおりである。この学校の徳目も、Boyer (1995)の徳目同様、日本人の私たちが見て全く違和感のない、宗教や人種を超えた設定となっていることがうかがえる。これらの徳は、品格教育を始めた初期には一月に1つ集中的に取り上げていたが、今はそのようなやり方をせず、全体を総合的に扱っているとのことだった。また、年齢によって取り上げる徳目を少し変えており、幼児や一年生では、子どもたちにもわかる、いくつかの徳だけを扱っているようだ。

この資料1に記された表は、全てのクラスに預って、子どもたち、先生方の意識を啓発するようになっている。また、次に示すのは、この全学共通の徳目を使いながら、品性を発達させ、人格に統合する必要性を学院内のメンバーの共通理解にするため、明文化したものである。

1. よい生活をしようと思ったら、あなたの生活がよくなるようにしなくてはなりません。
2. よい習慣を獲得して、あなたの品性をよい型にする努力をしましょう。
3. あなたの頭脳をよいことを知るのに使い(倫理学、読書、手本、よい習慣の実践などを通して)、あなたの心でよいことを愛しあなたの手をよいことに使しましょう。
4. 8つの品性スタンダードをあなた自身の指標として使しましょう。
5. もし、あなたが良いことをする品性を持っていたら、目には見えなくても、あなたは高潔な人なのです。

ところでこの学校の前学院長、Greer, P. (1992

～2005まで学院長)は、前ブッシュ大統領時代、教育庁長官がベネットだったころの教育庁副長官だったという。また、このGreerは、副長官に就任する前はボストン大学の教授だったとのことで、本校の紹介を受けたボストン大学とは縁の深い学校であるようだった。このことは、この学校がまとめている品格教育に関するプログラム、"The MKA Ethics Program. (revised)"を見てもわかる。この学校の品格プログラムを作った指導助言者6名のうち、一人は前学院長のGreer、その他Karen E. Bohlin, Edwin J. Former, Steven S. Tignerの3名のボストン大学の教授達の名前が書かれている。つまり、4人ものボストン大学の先生が関わっていることになる。私立の学校とはいえ、学校の特色を生み出す活動に、多くの大学教員が関わっているところ、加えて教育長の副教官まで関わっているところがとてもアメリカらしいと感じた。

ところで、この学校の教育方針は、質の高い教育を提供すること、真のコミュニティ感覚を育成することであり、そのために3つのプログラムを持つことを特徴としている。その3つとは、作文教育、コアプログラム、そして上記の倫理プログラムである。ここでは、品格教育に相当する倫理プログラムについてのみ解説する¹⁾。

さて、この学校で見せていただいた授業は、年少組キャンパスでは朝の会だった。幼稚園児が先生の周りに集まり、互いに名前を呼びながら、朝の挨拶をしたり、先生の問いかけに答える活動をしていた。小さな子どもの場合、他者に対する態度が重視されるとのことで、この種の活動を通して、相手の目を見て話をする、こと、問いかけにきちんと答えること、相手の名前を呼んで話しかけること、などの基本的な対人関係を学ぶとのことだった。

中学年のキャンパスで見せていただいたのは劇の授業だった。この劇は教員と生徒が創ったもので、その中に社会の要素、数学の要素などが含まれているとのことだった。

倫理プログラムのパンフレットによると、中学年では、日々の生活の中で人格を高潔なものにすることを目指すだけでなく、教科の中でも人格について考えるとのことである。たとえば、ハムラビ法典を歴史で学んだときには、本校の法典についても学ぶ。また、オデッセイを学んだときには、

オデッセイに出てくるよい品格、特に責任感、自分への信頼、中庸について討論する。教科外の活動でも、演劇、スポーツなど、どんな機会も、よい品性を習慣化する機会と考えて取り組むと書かれている。

授業を見せていただいた限り、上記の紹介通りの内容だったといえる。しかし考えてみると、朝の会の様子や授業で劇を取り上げることは日本とあまり相違ないように思えた。違っているのは教師の力点の置き方なのではなかろうか。日常の学校生活で、教師が集団生活でのルールを教えるのではなく、生徒に生涯につながる良い習慣を身につけさせようという意識があるか無いか、子ども達に日々徳に触れさせようとしているかどうか、これらの違いで同じ授業が違ってくるのではないかと感じた。

高学年の高校生中心のキャンパスでは、全校集会に参加させていただいた。この全校集会は、何人かの表彰があった後、生徒による「Honor Code (社交の作法)」と呼ばれるルールの理解を広めるクイズ大会があった。この学校のHonor Codeは、2年かけて、完全に生徒の手によって想起され、生徒会と学校とに承認されたもので、6年生から高校3年生に連応されるルールである。つまり、生徒の手による校則である。このHonor Codeの第一条には、「Honor Codeの目的は、この学校のすべてのメンバーの中に、礼儀と信頼の風土を植え付けることである」と書かれており、全体は資料1のスタンダードや学校の基本方針に沿った範囲で書かれている⁴⁾。

上級の学年になると、12人のメンバーが選ばれ、2人の教員とグループを作り、Honorカウンセラーという組織を作る。カウンセラーの主な仕事は、倫理的な問題について取り上げ、学習することを通して、学校中の生徒達にHonor Codeの趣旨を伝えることである。私たちが見せていただいたのは、カウンセラーによるHonor Codeの普及活動だったのである (Fig.1)。

倫理教育ハンドブックによると、高学年になると、品格徳目について、より深く理解することが求められるだけでなく、学校での日々の生活の中で学校というコミュニティを豊かにするリーダーシップを発揮することが求められる、とある。このカウンセラーの仕事も、コミュニティを豊かに



Fig.1 Honor Code (社交の作法)の理解を広める全体集会

するリーダーシップ活動の一環だと思われる。

その他、ハンドブックによると、高学年では授業の中でも引き続きよい品格について学ぶと書かれている。それは例えば高校1年生の公民の時間では、よいリーダーの意味、時と場所が変化したとき、それでも良いこと、悪いことはあるのかを議論する。中学3年生、高校1年生は特に倫理とリーダーシップに焦点を当て、よい習慣、強力な品性そしてリーダーシップのスキルを発達させるように情報を十分に提供する。学校の全体集会に礼儀正しく参加しているときも、学生新聞で公平に記事を取り上げていても、学生達は常に学んだ倫理と高潔さで自らを振り返ると説明されている。

Fig.2にこのキャンパスの品格プログラム開発担当者が開発した授業の資料を示す。アメリカの学校は9月頃新学期が始まる。この資料は9年生(中学3年生)用の資料である。実際に授業をする担当者は9月6日、10日、18日の3回取り上げるチャンスが与えられている。このシートの内容を見たと新学期の始めに、学校の目標を取り上げ、自分で深く理解する活動が組まれていることがうかがえる。プログラム開発担当者とお話させて頂いたところによると、この種の品格教育の授業計画と実施資料は1年分用意されている。教師達はこれらを夏休みに作り、始業式前に全体で討論し、そして、全クラスで実施してゆくとのことだった。

また、この学校には地域サービス担当者もおられた。学校を超えて、倫理的な理解を発達させるため、生徒が参加できる地域サービスを提供する機会を作っている。この学校では、ボランティア

中学3年生

9/5, 9/10または9/18

モンテクレレー・キンバレー学院の声明を理解する

・よい習慣をどのように実践させるか、いかに自分の学習を自分で自律を持ってやり続けるか、これらが変化し続ける世界で生きてゆく準備となる。

モンテクレレー・キンバレー学院の声明を読みなさい。グループで次の質問の答えを考え、討論の記録を取りなさい。(注で回収します)。

1. 私たちの学校のモットーを、次の3つの領域に分けて定義しなさい。
 - a. 知 識
 - b. 誠 意
 - c. 高 潔 さ

2. 「学びを受ける心を育て」できるようにするために、この学年でどんな経験を経験したいですか？ また、そのために、あなたは何ができますか？

3. 「自立して自発的な学習者」はどんな状態を持っていると思いますか？ (次のようなアイデアを食卓に例は、議論をしやすくして下さい)：授業の準備をする、時間を管理する、よい意味で自信を持っている(それぞれが何を意味しているか、確認して下さい)。

4. 「この学校を超えて、大学で、生活でリードする」とはどんな意味だと思いますか？

意見を言うという経験が分かるい環境で、活動的で、しゃやうと、そして注意深く考えた思考や実践は、将来に役立つ良き習慣を育む上、デュイ「いかに考えるか」

Fig.2 品格教育のワークシート例

↑この学校のモットーは3領域に分けて明文化されている。

を組織する機関を通して、担当者と保護者の委員を通して生徒に年齢にあったボランティアを提供していた。また、地域だけでなく、もちろん学校内でもサービス活動がある。年齢別、クラブや委員会、チーム別のグループが活躍しているとのことだった。

最後に教員は、生徒が最高に人格を発達させることができるように、倫理についてよく学び、それを自分のカリキュラムを連携させることに時間を取っていることが驚えた。パンフレットによると、自分の教科をアリストテレス、プラトーン、エピクテトス、カント、ミルを含む主要な業績と関連させているという。確かに、Fig.2の資料にも、デュイの名前が出てくるし、私たちが訪問した前日の夜は、3キャンパス合同の品格教育の打ち合わせ会議が行われていた。

本校を訪問して、National School of Character という品格教育の賞を受ける学校の実践のすばらしさを痛感した。では、National School of Character の賞を出す機関は、一体どのようなところなのか、次にこの賞を出すワシントンDCにあるCharacter Education Partnershipの紹介をする。

2. 人格教育の連携機関(Character Education Partnership)

ワシントンDCにあるこの機関(CEP)は、政府の要請で幼稚園年長組から高校三年生までの義務教育の期間の品格教育の発展を推進し、発展させるために1993年に設立された。この団体は宗教色のない、主要な支持団体のない非営利組織で、知的な達成と同じくらい子どもたちの倫理的、社会的、そして感情的な発達が重要だと考えている団体である。ここでも目的は、子どもたちを責任感と思いやりのある市民に育てるように支援することで、その活動の一環に、品格教育の優秀校を表彰する取り組みがある。これは1989年から始まったもので、品格教育のよりよいプログラムを開発する目的の一環として行われている。この賞は、資料3に示す11の原理を備えている学校を審査の対象としている。審査の評価基準もホームページや印刷物として公開しており、それらの基準に従って、各学校が自己評価して申請するところから、賞の審査が始まる。また、この資料3の評価基準についても、最初の原典はボストン大学のものであり、それを2003年、2006年に改訂したとのことである。

この11の基準を見ると次のことがわかる。それは、品格教育について表彰するとはいえ、品性に関するもの、教育内容は大きな枠組みを示しているに過ぎないものということである。例えば、「核となる徳」を定めることは規定しているが、どの徳を大切にしないかとは指定されていないし、必ずこの活動を入れなさいとも書かれていない。つまり、かなり自由度の大きな枠組みになっており、その枠内で自由に、各学校が自分たちの特徴を出しながら、品格教育を開発してゆける仕組みとなっている。

では、CEPの大きな枠組を持つものだけが品格教育なのだろうか。次にボストン市内で訪問した、宗教関係の学校と公立学校、そして大学の附属学校について紹介する。

3. 宗教色の強い学校

1) ボストン トリニティ アカデミー (Boston Trinity Academy)

2002年にキリスト教のある宗派から買い取って開設されたキリスト教系の学校で、6年生から高

校3年生までが在籍している。キリスト教に根ざした品格教育を目指しており、良いこと、真実を知っているだけでなく、それらを受用することを大切にしている。そしてその際の真実とは神にとつての真実、生活はすべての側面でも神に所属するものとしての生活が望まれる。学校の中では、高潔で、責任感を持ち、礼儀正しく、誠実で、他者に敬意を払い、親切に振る舞うことが期待されている。

この学校で見せていただいたのは全校朝会だった。キリスト教の礼拝堂で、2人の学生がスピーチをするのを全校生徒で聞く集会だった。一人の学生は、南アフリカにボランティアに行った話、もう一人の転校生の学生は、この学校に来るまでの自分の経歴を話していた。

その後、校長先生、スタッフの方とミーティングの時間を設けていただいた。そこでお話を伺ったところ、キリスト教の学校であることもあり、世界的な奉仕のネットワークを持っているとのことだった。そして、そのネットワークを通して近辺の地域だけでなく、外国を含め、社会的奉仕には特に力を入れている印象を受けた。生徒にあった社会的奉仕を紹介するのは、コーディネーターする担当の教員であり、社会奉仕、地域奉仕を通してリーダーシップや社会的正義の感覚、そしてそれが人格の形成につながると考えていた。

また、アメリカの学校にしては珍しく制服のある学校だった。これも自分の学校に誇りを持つためのもので、自分の学校にアイデンティティを持つことで、他の学校の生徒からの悪い影響を避けることを目的としているとのことだった。

2) ロックスベリー ラテン学校 (Roxbury Latin School)

この学校は1645年に設立された北米で最も古い私立の男子校で、競争率10倍に近い競争を勝ち抜いた1学年40人弱の、頭の良い生徒しかいない超エリート校である。宗教色の強い荘厳な見事な建物と青い芝生で覆われた広大な敷地、学校近辺の整備された環境の眺めの良さは「すばらしい」の一言であった。カリキュラムの内容は、一般の内容の他に、ラテン語やギリシャ語など、昔ながらの古典的な学問がカリキュラムに揃っていた。

学校では、社会科の授業を見せていただいた後、学校内を案内していただき、その後、校長先生とお話しする時間を頂いた。社会科の授業では、10

人程度の生徒が、円卓に座って、教師と中近東の地理や歴史について、現代の状況を含め、実に詳しく紹介する授業が展開されていた。授業を見せていただく限りでは、日本で中近東をあんなに詳しく教えることはないとは思ったものの、品格教育と特に関係があるとは思えなかった。

校長先生との話で、この学校では、教育の目的は信心深い市民になることであり、そのための品格を作ることでありと考えておられるようだと感じた。そして校長先生が仰るには、自分を含めどの教師も、人は何のために勉強するのか、ということを考えて、「よい人間になるため、よい人格を形成するため、社会に奉仕するため」ということを常に話して聞かせると仰っていた。

以上、宗教関連の学校を二校視察したが、視察した限り、1990年代の中頃に生まれた新しい品格教育としての教育は行っていないと感じた。宗教色の強い昔の学校にある、古典的な知識を身につけながら、それらをベースにして、重んじる価値、身につける徳をしっかりと理解し、それを実践してゆける人材の育成を目指しているという印象が強かった。しかし考えてみれば、これも人格の完成を目指す品格教育の一つのスタイルなのだと考えられる。

4. 公立学校・附属学校

ブルックライン (Brookline) 学区

この学区はボストンのお金持ちの住む学区であり、ケネディー族が通った学区でもある。またボストンには多くの有名大学があるので、研究留学で米国を訪問する日本人の家族が大変多い学区でもある。学区全体の核となる価値 (core values) としては、優れた教育、協力関係、個人差を大切に、という3つが掲げられている。学区の学校では、幼稚園年長組から8年生 (中学2年生) までが同じ建物で授業を受けているのが特徴的だった。

1) ローレンス校 (Amos A. Lawrence)

この学校は、日本人の比率がとても高い。私達が見せていただいた小学校2年生のクラスは、一クラス20人程度しか子どもがいないのに、日本人の子が4人いた。2006～2007年の統計資料によるとボストンのあるマサチューセッツ州の平均でアジア人の比率は4.8%だが、この学校のアジア

ア人の比率は29.9%だそうである。アジア人、特に日本人が多いことを配慮して、この学校には日本人のスタッフが4人常駐し、日本の子ども達の適応や家族との連絡、スタッフの日本人への理解に尽力しておられた。この学校には、上記の日本人のスタッフの他、スクールカウンセラー、スクールサイコロジスト、ソーシャルケースワーカーもおられ、教員以外のいろんな役割を持ったスタッフがおり、多様性に対する配慮の細かさは驚くべきものであった。母集団が多様になれば、それをフォローする側も、多様な役割を持つ人ととのチームワーク方式しなければとても対応しきれないに違いない。この点、日本の学校は、何でも教師の力を頼ってしまいがちなのではなからうか。子ども達の側が多様なのに、学校の中には教員しかいない日本の学校が少し不思議に思える気がした。

ところでローレンス小学校の声明としては、多様な母集団で、構造的で、思いやりのある教育環境を作り、やりがいのある教育を提供すること、そして、生徒達が、高度の思考、コミュニケーション、よい選択、知的で、道徳的で、社会的で健康的な成長に関するスキルを身につけることを促すとしていた。さらに、次の価値を獲得させるとも述べている。それは学びを愛すること、個人的な責任感、自主性、他者への経緯、コミュニティへ貢献しようとする意識、である。加えて、この学校が独自に定めている、生徒に約束しているルールとして「安全・安心、敬意を示す、責任感を持つ、積極的に、学習の準備をする」がある。しかしこれらの目標は、モンテクレイ・キンバレー学院と比較すると、学区と個々の学校の目標設定の間の一貫性が乏しいような印象を受けた。

ところでアメリカの学校では、生徒達の良くない行動を指導するのは校長先生や副校長先生など、管理職の仕事である。校長先生との対話で校長先生がどのように生徒を指導なさるのかをお聞きした。それによると注意する行動の基準を定めて、教員、生徒全員に周知し、行動が良くない時には、用意している生徒指導用の表に学生が記入することで反省を促すスタイルを取っておられるとのことだった。学校中に周知している行動の基準とは次のようなものである。

(A-) 無政府状態；不作法、騒々しい、秩序が

ない。

- (B-) 支配的；他者を仕切る、いじめる、嫌がらせる、威張り屋がいる。
 (C+) 協力的；助け合う、支持にしたがう、外発的動機付けがある。
 (D+) 民主的；信頼、責任感、自立心を発達させる、内発的な動機がある。

ところで生徒が騒がしいとき、校長先生や教師は「君たちはどのレベルにいるかな？ 私にはBのように思える」というように問いかけをするという。そして生徒達、教師達には、次のように指導すると明示しているという。

1. 行動の4段階を学び、常にCかD段階にいるように努力しなさい。
2. 教師達は、生徒に「どのレベルにいる？」と尋ねて生徒自身に自分をチェックさせる。自分自身で高いレベルになるようにしなさい。AかBのレベルにいるときには特にはです。
3. もし、選択するチャンスを与えてもAかBのままだったら、報告書を書いてもらいます (Fig.3)。
4. それでもAかBだったら、校長先生か副校長先生と面談することになります。

_____ について	
名 前:	_____
月 日:	_____
私がしたことは?	_____ _____ _____
このようなことが二度と起きないために私ができることは?	_____ _____ _____
私がしようと思うのは?	_____ _____ _____
私はこの作文を読んで保護者と話し合いました。	
保護者名:	_____ 私の名前: _____

Fig.3 反省文の形式

この校長先生の指導方法も日本と指導方法と少し違うように感じた。日本では子どもたちが騒いでいたら、「静かにしなさい」とストレートに言うのではなからうか。この点、アメリカの方法は、間接的に話しかけ、あくまで子どもたちに考えさせるスタイルを取っているようだ。つまりルールを押しつけたり生徒を評価する基準にするのではなく、生徒自身が自分を律する基準にするように導いてゆく態度が伺える。

2) ジョン・ピース校 (The John Pierce School)

この学校もアジア人の比率の高い学校で、22.3%がアジア人である。この学校の特徴は、学校全体が大きな講堂のような、天井も壁もない空間の中に、各クラスが作られていることである (Fig.4)。学校が作成した資料によると、この学校の鍵となる5つの徳目は、「安全・安心」「敬意を示す」「責任を持つ」「適切な行動を取る」「学習の準備をする」というものであった。社会科学の授業を見学したが、授業を見た限りでは、これらの徳目が反映されているかどうかはわからなかった。しかし完璧なオープンスペースの学校の建物自体が、他者に対して憧れを作らない理念を表しているようにも思えた。

3) ボストン大学学院 (Boston University academy)

1993年に設立されたこの学校は9年生から12年生までが通う小さな大学で、ボストン大学の敷地に隣接し、ボストン大学と連携してカリキュラムを開発している学校である。ボストン大学は倫理・品格教育開発センターを持っているので、それに関するカリキュラムを持っているとのことだった。加えてケンブリッジ地区という、全米でも



Fig.4 体育館の中にあるようなオープンスペース

有数の学術都市にあるこの学校は、ボストン大学だけでなく、マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学などともとても近い関係にある。教員と大学の連携も取りやすそうで、見せていただいた技術の授業は、マサチューセッツ工科大学の支援を受けて行っているプログラムとのことだった。また、品格教育については、この学校は、品性に関する徳目を設定しているわけではないが、授業の内容で品格に関するものを取り上げていると感じた。

例えば、Fig.5は、見学させていただいた国語の授業で使っていた資料の訳である。ハックベリーフィンの冒険に関する授業で、Fig.5の項目について全員で討論していた。この討論の議題を見ると、ハックの人物や人間性、ハックの判断の際の品格の現れ方に焦点を当てている部分がある。人種問題、人間性に関わるデリケートな判断などを授業で取り上げる教材にするには、このようにある種の文学作品や映画などを使うことも有効なのだと考えさせられた。

歴史の授業では、単にある出来事だけでなく、当時の支配的なものの見方を紹介したり、当時の自然科学の動向を確認する形で当時の文化的、時代背景との関係で、その当時の出来事や政治的主

ハックヴェリー・フィンの冒険 (第25～28章)

1. ハックの2度目の良心の危機について：女の子のためにお金を「隠す」決意をしたこと
2. 奴隷が宛められるとき、「二人の息子は目を上ってメンフィスへ、お母さんは目を下ってオランダへ」というとき、ハックはどうしましたか？
3. ハックはメリー・ジューンには嘘をついていませんか？
4. お金が無くなったことに対する「黒人」への批判について、ハックは正しいことをしましたか？
5. 「あなたほどでこのいい本を僕には読めないうらいです」とハックはメリー・ジューンに言いました。ここにはハックのどのような「考え方」が込められていますか？
6. 次の点について、この小説におけるマーク・トゥウェインの人間性に関する見解を考えましょう。トゥウェインの考えでは、人間にとって最も一般的なものの性質と特徴とは、一体どんなものですか。それはハックの人物に反映していますか。ジムはどうですか。

全章目の目録：25～33を採んでみる。

Fig.5 国語の授業の教材

張を理解させようとしていた。具体的には、歴史の授業なのに、ケプラーの法則の話が出てきたり、日本では一般には学ばない哲学者の主張の話をしたりして、歴史を解説していた。日本のやり方で歴史を学んだものには、どうして歴史に倫理学や理科が出てくるのだろうか、と思う授業であった。品格教育における徳は、現在の社会的、文化的背景の中で、どのような行動として表したらよいかを生徒達に考えさせることも含まれるとしたら、このような授業も品格教育に含まれるのではないかと感じられた。

以上、公立学校は学区で核となる徳を定めているが、2校を視察した限り、モンテクレイ・キンバレー学院のように、その倫理的な核がすべてのカリキュラム、教科外活動、学校の指導方針となっていると言えようように思えた。むしろ公立学校は、生徒達の多様性の大きさとという現実問題にいかに対処していくかに大きな力が注がれており、倫理的な品格を育てることよりも、行動の統制を通して品格を作っているように思えた。大学附属学校の方は、コアとなる徳を定めてはいなかったが、人として大切なものを教えようという姿勢が国語だけでなく社会の授業を通して感じられた。

5. まとめ

今回、ボストン大学の先生の紹介で、ボストン近郊を中心に、いくつかの学校で品格教育を見せていただいた。そこで感じたことは、一口に「品格教育」と言っても多くのやり方があると言うことである。

まずモンテクレイ・キンバレー学院、ローレンス学区の公立校など、宗教的でない学校は、程度の差こそあれ、核となる徳目を定めて、学校内の規律の核をつくり、それをベースに学校風土を作っているように思えた。それらの学校では、ボストン大学学院を含め、人間的な自分の取る良い行動について考える場が、授業のカリキュラムの中に意識的に組まれている。しかし活動や授業の内容そのものは、日本にも近いものが多くあるように思える。日本との違いは、やはり「核」を決めて、教職員がそれらについて共通の認識を持ち、それぞれの担当の授業、担当の活動で常に品格教育を意識し、子どもたちに声をかけてゆくかど

か、そして、その体制を組織的に作れるかどうかによるのではなからうか。

次に、宗教色の強い学校は、宗教の教義そのものが徳の核になっており、学校の核を作ることに余り力が注がれていなかった。また、宗教の持つ地域ネットワーク、世界ネットワークを利用した社会奉仕に力が注がれている印象を受けた。

他方、全米の品格教育優秀校を表彰する品格教育パートナーシップ(CEP)は、品格教育について大まかな枠組みしか作っていないとはいえ、資料3の内容を見るとSEL(Social emotional learning)をイメージさせるようなカリキュラム開発を目指しているように思える。

以上のことから、アメリカ東海岸の学校だけでも、品格教育は、哲学的理念を大切にすることも、社会奉仕を大切にすることも、SELを重視することも、多様なタイプが見られることが伺えた。

引用文献

- 青木多寿子 1999 「アメリカの小学校—The basic school 実践校のケースレポート」岡山大学教育学部附属教育実践総合センター研究年報、第2号、
- 青木多寿子 2002a アメリカの小学校における道徳教育の現状 道徳と教育 No.310・311 Pp.58-78.
- 青木多寿子 2002b 「アメリカの小学校に見る品性徳目教育とその運用」岡山大学教育実践総合センター紀要 第2巻、Pp.47-59.
- Bohlin, K. E., Farmer, D., & Ryan, K. 2001 "Building Character in Schools; resource guide." Jossey-Bass A Wiley Imprint.
- ボイヤール 1997 「ベーシックスクール；アメリカ最新小学校改革提案」中島章夫監訳 玉川大学出版部 (Boyer, E. 1995 "The basic school; a community for learning.")
- ディヴァイン, トニー他 2003 「『人格教育』のすすめ」上寺久雄監訳 コスモトゥーワン ("Cultivation Heart and Character; Educating for life's essential goals", 2001.)
- 加藤十八 2004 「アメリカの事例に学ぶ学力低下からの脱却—キャラクターエデュケーションが学力を再生した」学事出版
- 加藤十八 2006 「ゼロトレランス—規範意識を

どう育てるか」学事出版

Lickona, T. 1993 The return of character education, Educational Leadership, November, 6~11.

リコーナ, トーマス 2001 「人格の教育—新しい徳の教え方学び方」水野修次郎監訳 北樹出版

リコーナ, トーマス 2006 「人格教育のすべて」水野修次郎, 望月文明訳 麗澤大学出版会
 (“Character Matters: How to help our development good judgment, integrity, and other essential virtues. 2004.)

Ryan, K. & Bohlin, K. E. 1999 “Building Character in Schools; practical ways to bring moral instruction to life.” Jossey-Bass A Wiley Imprint.

参考資料

- ・ CEP’s Eleven Principles of effective Character Education.
- ・ Character Education at Boston Trinity Academy.
- ・ Core Values of the Brookline Public Schools.
- ・ The Handbook Pierce; a guide for students & families. The John Pierce School.
- ・ Honor Code; the Montclair Kimberley Academy.
- ・ Lawrence’s Levels of Behavior.
- ・ The MKA Ethics Program (revised), The Montclair Kimberley Academy.
- ・ At school in Brookline. The public Schools of Brookline / Brookline, Massachusetts (2007).
- ・ The Roxbury Latin School; who we are, what we do, and why. 2007.
- ・ The Roxbury Latin School; 2007 ~ 2008 Catalogue.

注

i 本研究を実施するにあたり、科学研究費（基盤研究B；課題番号18330191；代表、青木多寿子）を使用した。本研究をまとめるに当たり、多くの学校を紹介して下さったボストン大学のBernice Lerner教授、モンテクレア・キンバレー学院の品格教育ディレクター、Karen Newman先生、ボストン市内で学校を案内して下さったボストン大学教養学部長Linda Wells先生、教育学部長Charles Glenn先生にお礼申し上げます。また、各学校で多くのスタッフの方がご多忙の中、話を聞かせて下さいました。心からお礼申し上げます。

ii この学校が重視している3種のプログラムの紹介冊子は、この学校のホームページで閲覧できる。

iii Honor Codeは「1. はじめに」、「2. 公約」、「3. 学生組織」、「4. Honorカウンセラーの選出方法」、「5. 公約違反の定義」、「6. 公約違反への対処」、「7. Honorカウンセラーの解任」、「8. 公約の見直し」、「9. 断辞」、で構成されている。この中の「2. 公約」の全訳を資料2に示す。

iv この賞の賞金は20,000ドルである。

v この表を見て、つくづく感心したことがある。それは、D段階の存在である。日本の生徒指導は、このリストで言うところのC+段階でOKとしがちなのではなからうか。ところがこの表では、Cの上のD、つまり、他者から評価を得ようとするような段階ではなく、自分の中に行動の基準を作ろうとする段階が設定されている。

【資料1】

モンテクレール・キンバレー学院の品格基準

この学校に関わる全てのメンバーは、次のように振る舞い、考えるように努力する。

敬意を持って (respectful)

私たちは自分の価値観は大切にしながら、他の人と関わる際には礼儀正しく振る舞います。自分の周りの、私たちが関わっている世界をそれなりに意識します。

親切に (friendly)

私たちは他者との関係で、善意と寛容さを示します。友達をつくるには、自分たち自身が良い友だちでなくてはならないことを知っており、どの他者にも理解と誠実さと敬意を持って対応しなくてはならないことを、私たちは知っています。

責任感を持って (responsibility)

私たちはコミュニティのメンバーであるという自覚を持って、義務を十分に果たし、精一杯力を発揮して課題を完璧にやり遂げます。必要なときには援助し、自分の時間の提供し、ふざわしい努力し、ふざわしい資源で支援することを自発的に申し出ます。

自分を信頼して (confident)

私たちは他の人が自分をどう見ているかは気にせず、自分に関するよいイメージを持ち続けます。自分たちの才能やスキルをよりよいものにするよう、可能性のあることには取り組み、チャレンジします。自分の仕事には謙虚さと批判を受け入れる謙直さを保ちながら、こだわりと誇りを持ちます。他の人に批判されることを恐れずに、自分自身の意見を自由に表明し、適切でない行為を目撃したときにはいつでも、率直に自分の意見を述べます。

節度を持って (temperate)

私たちは自分の生活の全ての面でバランスを取ります。勉強や個人的な興味に熱中することがあっても、中庸を維持します。リラックスすることは大切ですが、他方で、私たちは、何かに直面したときには、節度とチャレンジ精神をもって自分をコントロールし、意志を強く持つことに全力を尽くします。

公平に (fair)

私たちは全ての生徒が偏見で誤解される恐怖を感じることなく振る舞ったり話したりできる環境を創ります。コミュニティ内の他者、個人の違いに気づき、それを理解するように努めます。個人の違いに気づいても、私たちは常に、全員の中の機会が均等になることに価値を置きます。

十分な情報提供を (informed)

私たちは、意志決定をするのに自分自身の経験を頼りにするだけでなく、世界をよりよく知ろうとする活動をも大事にします。私たちは知識を用いて、より平和で共感性の高い社会のイメージを心に描きます。

誠実に (Honest)

私たちは、他者に対してだけでなく、自分自身に正直であることは大切だと理解しています。そして私たちは言葉や行動にも誠実であることが大切だと理解しています。私たちは自分の仕事やアイデアが自分自身のものであること、そして自分の全ての活動を、勇気と責任に結びつけて行動することに誇りを持っています。

【資料2】

Honor Code (モンテクレール・キンバレー学院)

第二章 公約

私たちは、モンテクレール・キンバレー学院 (MKA) で、他者に敬意を示すこと、信頼すること、学習すること、正直であること、それを実践すること、そしてそれらに価値を持つことが期待されている。MKAの生徒として、私たちは敬意を持ち、信頼し、正直な学校環境を創るようルールを創り、このようなコミュニティを創り、維持しようとするこの学校の考えを大切にしたい。私たちは学術的な不正直、個人的な不正直、そして他者に対する冷たい、残酷な態度は私たちの学校の良さを崩し、私達の人格的な成長を妨げることを理解している。もっと詳しく述べるなら、私たちは次のことを宣言する。

- ・テストや成績に関わる時、先生の許可が出るまで他者に手助けはしないし、他者からの手助けも受けない。
- ・他の資料を使うときはきちんと引用し、自分が実際に取り組んだこと以外では単位を取らない。
- ・自分や他者の持ち物だけでなく、他者に対しても敬意を示す。
- ・他者に冷たくしたり、嫌がることをしたりしない。

もしルール違反を見たときには、このコミュニティのメンバーなら、その生徒に注意するのも私達の責任であるし、その生徒がこの学校のメンバーとしてルールに従うように促すのも私達の責任である。私たちは、もし、ルール違反を見て、それを違反だと伝えなかったら、私達自身もルール違反していることになるを理解している。

このルールを心にとどめて、私達は友達、先生、そして管理職の先生達に対する敬意を保つだけでなく、道徳性と信頼感あるよい学校の雰囲気を保つことに貢献する。

【資料3】

11の原理；効果的な品性教育のために (Character Education Partnership)

原理1：よい品格の基礎として、メンバーが共有する核となる倫理的な価値（責任、正直、フェア、尊敬など）、よい品格を作る行動の価値（勤勉、根気など）を作る。倫理的な価値だけでなく、行動の価値の質も大切なものである。

原理2：考えること、感じること、行為を含めて生活に生かせる包括的な「品格」を考えること。そのために生徒は学習、話し合い、モデルの観察、価値に関する問題解決を通して考え、共感のスキル、コミュニティへの貢献、よい人間関係、読書、話を聞くことなどを通して核となる価値への感性を高め、好社会行動を実践し（感情の伝達、積極的傾聴、援助スキルなど）、それを、他者との関係で繰り返すことで（異年齢交流、葛藤の解決、学校や地域のコミュニティサービスなど）発達させる。

原理3：品格を発達させるのに、包括的、意図的でよい行いをする効果的なアプローチを用いていること。そのために、学校の核となる価値を学校のすべての要素（保健体育の授業を含むすべての教科、部活、クラブ、その他の教科外活動）に統合する隠れたカリキュラムとし、学校のスタッフはよい行動が現れるのを待つのではなく、意図的によい行動を起こすようにすること。

原理4：毎日の生活で、学校のすべての場所で、互いに助け合う学校風土を作ること。そのために民主的で、互いに助け合い、正義に満ちた小世界を創り、生徒間だけでなく、教師間、生徒と教員、教員と家族の間も含めること。安心できる土壌、所属感の良い人になろうと思いを育て、価値を内面化させて行く。

原理5：道徳的な活動を実践する機会が提供されていること。子どもたちは実践することで最もよく学ぶ。実生活での挑戦を通して、子どもたちは他者との協調の仕方、援助の仕方を学び、品格ある実生活に必要なスキル、活動を習慣化することになる。

- 原理6：全生徒が尊重し合い、自分たちの品格を発達させ、より良くなるように助け合う意味ある学術的なカリキュラムにチャレンジしていること。生徒は自立的に何かをやり遂げたときに人間として価値があると感じやすい。また、科学での倫理問題、歴史上の問題や決定についてのディベート、文学上での道徳的なジレンマや品性について討論など、教員は教師として教えたアカデミックな内容と発達させたい品格の両方の自然な連結を工夫する必要がある。教師が生徒達の知的好奇心、批判的思考、勤勉性などに価値をおいて励ませば、生徒は最高のことをやろうともしつと努力するだろう。
- 原理7：生徒の動機付けを高める工夫をしていること。品格は他者の尊敬と必要性に注意を払うことが基本となっている。この気風を学校で高めようとする場合、強く押し進めすぎるとかえって良くないこともある。生徒に気風への素直さを求めるというよりはむしろ、失敗をしたときに反省や、問題解決の方法や償う意味ある機会を与えて生徒達を援助する機会を探す。
- 原理8：学校の全スタッフ（事務員、給食担当者、警備員などを含む）が、道徳的で学習するコミュニティの品格教育に責任を持っているという意識を共有しており、生徒の学習と積となる品性を結びつけようとしていること。時には、生徒達にとって必要な経験、変えた方がよい事態は何なのかなど、自分たちの取り組みを振り返る機会を設けながら、学校をよくするために生徒が協力し合う機会、意志決定をする機会、スタッフの研修会を設けているかを考え、それらに時間を割く。
- 原理9：品格教育を推進するのに、共有している道徳的なリーダーシップと長期間のサポートがあること。品格教育を担当するリーダーがいて、スタッフ、生徒、両親や可能な地域の人を含め、責任を持って品格教育の計画、改善、支援について話し合いをする。スタッフの研修、教育委員会や県の支援、品格教育の推進の長期的な支援をする。生徒には学級会や生徒会、ピアサポート、異年齢交流、クラブなどで品格を身につけることができるよう、適切な役割を果たす。
- 原理10：品格を形成する努力に家族や地域のメンバーとしての両親を含んでいること。品格教育の実践をよりいっそう、信頼してもらうために、学校使、メール、保護者会などを通して、品格教育の目標や活動について保護者に伝えてゆく。
- 原理11：学校の品格、品格の教育者としての学校スタッフ、そして生徒への良い品格のマニフェストの程度を評価すること。3つの側面に注意を払い、質と量について評価する努力をしなくてはならない。(a)学校の品格：学校がもっと支援的な集団になったかどうかを評価する。例えば、次のような質問を用いる。「この学校（クラス）の生徒は、お互いを大切にしますか」「この学校（クラス）は家族のようですか」。(b)品格の教育者としての教職員の成長：学校の全スタッフは、子どもたちの品性を育てるのに何ができるか理解したか。スキルはどうか。品格の教育者としていつも行動する能力が発達したか。(c)生徒の品格：倫理的な価値をどのくらい理解し、それに関わり、行動したか。生徒の出席率が上昇したか、喧嘩や停学は減ったか。公共物破損、違法薬物、たばこが減ったか、などは指標となる。また、3つの側面（知識、感性、行為）から評価する必要がある。